



# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

## 特集 授業を活発にする「やりとり」の活動

特集

巻頭エッセイ 言葉を超えるマイムの力 .....	ケッチ！（が～まるちょぼ）	01
英語科の「言語活動」は他教科と別物ですか？ .....	今井裕之	02
即興的な (impromptu) 活動を取り入れた授業の実際 .....	原田尚孝	04
「日本文化紹介」を意識した授業 —教師と生徒との会話から生徒同士の会話、そして統合的な活動へ— .....	青柳有季	06
Interaction を生かした わかる授業 .....	海部祐希子	08
生徒の「発信する力」を育てる授業づくり —ディスカッション、ディベートにつなげる簡単な工夫— .....	山本崇雄	10

連載

英語教師のための基礎講座 授業マネジメントの勘どころ：話し方の勘どころ (3) .....	田邊祐司	12
評価クリニック 文法問題から何を知る .....	根岸雅史	14
授業レポート コミュニケーション力を高める英語の授業 (2) .....	林 秀樹	16
小学校英語 Just Now 仲間と進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 .....	加納志穂	19
単語の文化的意味 86 river .....	森住 衛	21
Essay Communication Breakdown .....	James Hershman	22
英語指導のスパイス アキラ氏への手紙 .....	山崎寛己	23
AROUND THE WORLD 北ゲルマン語を巡って [3] .....	森 信嘉	表紙裏
表紙写真について バングラデシュに小学校！？ .....	室井美稚子	表紙裏

Vol.29

FALL 2014  
SANSEIDO



## 言葉を超えるマイム之力

ケッチ！（が～まるちょぼ） Ketchi! (GARMARJOBAT)

「みんなが笑ったのよ！ しかも同時に！」ベルギーのパフォーマンスフェスティバルに参加した時のこと。ショーの後にベルギー人のおばちゃん興奮気味に話しかけてくれた。「ありがとう！ あなたたちは素晴らしかったわ！ 客席にはいろんな国の人がいだから何言語も入り乱れていて、隣の人と話すのも難しかったのよ。それなのに、あなたたちのショーを見て、みんなが笑ったのよ、しかも同時に！」

インターナショナルなフェスティバルだったし、ベルギーには公用語が3言語もあるから、会場内では10言語以上が使われていたと思う。だから、パフォーマーたちはベルギーの公用語ではなく、今や世界の共通言語になった英語でショーをやることが多い。でも、英語が話せない人にとってはチンプンカンプンだし、英語に訳された他の言語からのジョークは、意味がわかったとしても笑えないこともある。さらに自分の言語に訳すのにどうしても時差ができてしまう。そう考えると、客席の「みんな」が「同時に」笑うという状態は、かなり珍しかったはずだ。そのフェスティバルで数多くのショーを見てきたおばちゃん興奮したのも無理のない話だ。

が～まるちょぼのショーには言葉がない。視力と想像力は必要だが、見たままがすべてだから、見ていればわかる。脳内で翻訳することなく笑える。だから世界中でパフォーマンスできる。しかし、ひっきりなしに世界中から出演依頼がくる人気の秘密（手前味噌ですみません！）は、「言葉がない」ことだけではない。もっともっとすごい秘密がある！ それは、マイム（パントマイム）が持つ力だ！

が～まるちょぼが目指すのは、身振り手振りで意味を伝えるジェスチャーゲームのようなものではない。ジェスチャーは、口から音は発していないが言

葉の一種だと言える。が～まるちょぼが心がけているマイムは、言葉を使わずに言葉以上のものを伝える表現だ。例えば、突然スーツケースが空中に止まり、動かなくなってしまうパフォーマンスがある。スーツケースが空中に浮いているように見せる技術も大事だが、それだけを演じていたらお客さんには「すごいね！」としか思ってもらえない。極端に言えばお客さんにとっては人ごとだ。

が～まるちょぼが大切にしているのは、スーツケースが空中に止まってしまったことによって起きる主人公の心理だ。もし、みなさんが歩いている時に突然スーツケースが空中に止まったら、どう思うだろう？「あれ？ おかしいな。」「そんなバカな！」「どうしよう？」「急いでるのに困ったなあ。」「もっと力を入れたら動かな？」「うわ！ おもしろい体験してるなあ！ ラッキー！」などなど、人によっていろいろな感情が生まれるはずだ。不思議だと思う感情、自分の目を疑うような感情、状況を打破するための思考、困惑、怒り、あきらめ、喜び、と絶えず心を動かしているのが人間だ。同じ人間として世界中のお客さんにも、こういった心の動きは言葉を介さなくても十分に理解できるものだ。

言葉にしなくても心に生まれる様々な感情をしつかりと演じることで、お客さんに言葉以上のことが伝わり、共感が生まれる。それが笑いに、感動につながる。これがマイム之力だ！ この力を信じているからこそ「みんなが同時に笑う」一瞬が生まれるのだ。

### ケッチ！（が～まるちょぼ）

が～まるちょぼは、ケッチ！とHIRO-PONによるサイレントコメディ・デュオ。1999年結成。言葉や文化を超えたパフォーマンスが高く評価され、「世界が認めたアーティスト」としてこれまでに30ヶ国を超える国々のフェスティバルなどから招待されている。日本国内でも活躍中。

## 英語科の「言語活動」は他教科と別物ですか？

今井裕之

(関西大学)

## 1. 学習指導要領の目指す「言語活動」

「他教科では言語活動を日本語で行うのだから、英語科の言語活動とは違って当たり前」というのも、もっともな見解である。だからといって「十分な英語知識がなければ言語活動はできない」、「英語力をつけるのが目的で、言語活動はそのための手段だ」などと言語活動を軽視しないのが英語教師のプロ意識だと思う。

「言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要である」（中教審、平成20年答申）ことから、「生きる力」育成のために、小中高の全教科で「言語活動」の一層の充実を図ることが現在の学習指導要領にはうたわれている。

文科省の『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』に紹介されている言語活動事例には、国語科ほか全教科にわたって、記録、要約、説明、論述などの、思考や判断を論理的に表現する活動が多く挙げられている。このように、論理的思考や判断を話すこと、書くことで表現する言語活動を典型例に掲げられてしまうと、“I think ~ because ...”のような言い方を中学2年で学ぶ入門期の学習者にとっては、ハードルがとても高く感じられるだろう。また教師も「英語科は『基礎的・基本的な知識・技能の習得』にその目標を留めて、『思考力・判断力・表現力等の育成』には踏み込まない！」と宣言したくなる。しかし、それも我々のプロ意識が許さない。

## 2. 論理的表現重視、即興的対話不足

中教審の答申にある、言語は、「コミュニケーション

ンや感性・情緒の基盤」との指摘は、現在の言語活動のあり方を考える上で示唆的である。私たちはコミュニケーションを通して、直接ことばで表現されない情緒、感情をも読み取り合う。感性・情緒の基盤としての言語は、論理や思考の基盤としての言語と一体をなすものであり、一方だけを指導すべきものではない。しかし実際には、外国語科も含め各教科の言語活動は、論理的思考・判断の表現が重視される傾向は強く、感性・情緒に富むコミュニケーションは軽視されていると言わざるをえない。

もうひとつの特徴として、評価方法を意識してか、単元目標となる言語活動に、事前に原稿を作成するスピーチ活動が多い点も挙げられる。事例集の中には、「満員バスのなかで高齢者に席を譲らない友人に会った時、自分（立っている）ならばどう話しかけるか」というペア、グループでの対話的活動事例も挙げられている。友人関係に配慮しつつ状況を判断し、自分の意見を述べることが求められる、感情、倫理、論理が入り交じるなかなかの難題である。感性や情緒が論理や倫理と相まって葛藤するなかで判断し、他者との対話のかたちで表現される素晴らしい課題であるが、ハードルが高いため、スキットを事前に作成する scripted 型であり、即興的の対話活動ではない。

しかし、私たち英語教師は、他者との対話活動が外国語学習には必要だと体験的に知っている。授業運営でも、ペア、グループでの言語活動が不可欠であることも感じている。論理的思考課題のハードル、評価方法の制限との折り合いをつけ、対話的な言語活動を充実させ、感性や情緒の育成にも光を当てることが現在の課題と言えよう。

### 3. 論理と感情を表現する即興型対話活動

これまでの議論を整理しておきたい。1) 言語は論理的思考の基盤としての側面と、感性・情緒、コミュニケーションの基盤としての側面がある。2) 論理的思考を育む言語活動はハードルが高く、思考—文章化—表現の手順を踏む scripted 型の活動が多い。3) 生徒を個別に評価する必要性からか、単独でのスピーチ活動が多い。これらを表にすると以下になる(ディスカッションは半ば scripted 型とも言える)。

	Scripted		Unscripted	
	論理思考	感性情緒	論理思考	感性情緒
単独	フォーマルスピーチ		即興スピーチ	
複数	スキット, ドラマ	ディスカッション	チャット	

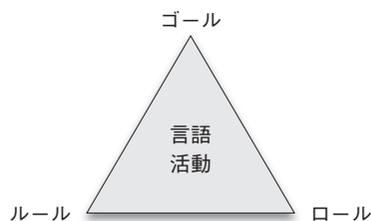
今回の特集の、チャット、スキット、ディスカッションの実践事例は、scripted speech 中心の言語活動を超えて、言語活動について様々な工夫や発想の転換を図っておられる先生がたの報告である。

チャット活動では、限られた発話から相手の意図や感情を察し、それに対する同意・共感を表現する言語の働きが重視される。身近な話題について短い発話をつながながら、感情や意図を伝え合うことを目標とするチャットは、unscripted 型の言語活動への第一歩である。台本がないからといって、話題だけ与えられていきなり自由に話させるわけではない。即興的な活動にも一定のお膳立てはあるし、対話には緩やかな社会的スクリプトがある。チャットであれば、相手にいきなりプライベートな質問をしないこと、相手の発話を無視した脈絡のない返答をしないことなど、暗黙の(だが指導する)「ルール」がある。

スキット活動は、script のある対話的言語活動で、その一番の特徴は、自分自身ではない「役割(ロール)」を演じる場所にある。演技者として役のセリフを理解し、感情移入して発話する。スキット活動は、「英語の暗記」を超えて、演劇として取り組まれるとき、その意義が一層実感される活動である。

ディスカッション活動は、論理的思考の領域での課題で、最終的に参加者が話し合いの「ゴール」を共有するのが特徴である。他者の意見を傾聴し、自分の意見と対比して、合意を目指す。それだけに発話が長くなりがちで、生徒たちへの負荷が高くなるが、協同してこそなしえる成果を目指す、組織・社会的言語活動(の第一歩)が体験できる。

「ルール」「ロール」「ゴール」は、実はどの言語活動にも多かれ少なかれ含まれる。ゴール到達のために、各々の役割(ロール)を帯びて、ルールを踏まえて活動できるよう言語活動をデザインするのが、我々の使命である。



### 4. Language is a tool for communication, or communication is a tool for learning English.

語彙・文法・音声の知識・技能は、コミュニケーションのための道具と言われる。しかし、外国語の授業を観察していると、コミュニケーション(言語活動)が、英語の知識・技能を習得するための道具になっているケースが少なくない。これでは、言語活動の中身が薄く、充実度が低くなる。「道具としての言語の知識・技能の習得が十分でない外国語教育では、道具(=手段)と目的の関係が逆転するのは当たり前だ!」と言ってしまえば、コミュニケーション力が養われる授業にはずっと辿り着かない。

慎重かつ熱心に言語の知識・技能の定着・習得を目指す授業者の信条に共感する一方で、「言語の知識・技能」と「コミュニケーション」とを分けて、一方を「目的」とし他方をそのための「道具」とする発想を捨てて欲しいと思う。まだ知らないことに対して、臆せず臨める言語活動の場としての授業づくりを行うことで、「まずは知識(道具)」という呪縛を脱し、言語の知識・技能もコミュニケーションも「目的であり道具でもある」という発想への転換を果たせるのではないだろうか。

## 特集 授業を活発にする「やりとり」の活動

即興的な (impromptu) 活動を取り入れた  
授業の実際

原田尚孝

(熊本県熊本市立北部中学校)

## 1. はじめに

2013年12月に文部科学省より「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表された。その中で、2016年度に学習指導要領が改訂され、2020年度より全面実施となることが示されている。中学校においては、「身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる力を養う」ことや「授業を英語で行うことを基本とする」ことが掲げられており、内容に踏み込んだ言語活動が重視されることになる。これからますます、即興 (impromptu) を意識した言語活動が重要なものとなる。本稿では、即興で行う「会話・やりとり・チャットの授業」の一例を紹介する。

## 2. 即興的な活動を取り入れた授業の実際

## (1) Classroom English の活用

日々の授業において、生徒とのコミュニケーションの手段として Classroom English が重要な役割を果たす。私は2001年の海外研修で、イギリスのある Grammar School を訪問し、授業を参観する機会を得た。それらの授業の中から、教師が使う Classroom English を記録し、自分の授業でも使っている。以下はその例である。

## 【私語を注意する】

- ・ Keep the talking down.
- ・ What was the last word I said? Quiet!
- ・ I need absolutely perfect silence.
- ・ Music has to start with silence and has to finish with silence. (音楽の授業)

## 【質問を受ける】

- ・ Are there any questions to begin with?

- ・ Any questions?

【授業中の指示・声かけ】

- ・ Are you listening? ・ Very important!
- ・ Quick!
- ・ Underline it! ・ Let me help you.
- ・ (いくつか例を示したあとに) Do the others.
- ・ Simple question! Should have more hands than that!
- ・ Do number 110. ・ Put your pen down.
- ・ As soon as possible, please.
- ・ Just do exactly what you were told.
- ・ Somebody, tell me.
- ・ Did anyone get it right (wrong)?
- ・ Do not use the ruler. Draw free-hand. (美術の授業)
- ・ Press them forward now. (テスト用紙を後ろから前に回しなさい)
- ・ Finish the one you are doing.

【誉める】

- ・ Absolutely correct (right).
  - ・ It's perfectly all right. ・ Excellent.
- さらに私の場合、現在完了や関係代名詞などは、未習であっても積極的に使うようにしている。
- ・ We have just finished No.1. Let's go to No. 2.
  - ・ Are there any words that you don't know? また、生徒指導上の注意等も英語で行う。
  - ・ When you finish writing, please put your pencil down on the desk and look up (look at me).
  - ・ You don't need to talk now. You have to listen!

このように、教師が普段の授業の中で自然な形で理解可能な英語を多量にインプットする。生徒はそれらを聞き、最初は類推し、くり返し聞くことで何を言われているのかわかるようになる。

## (2)Free Conversation

日常的によく使う英語表現を一覧表にして4月の最初の授業で生徒に配布する。その一覧表を使って、Free Conversationの活動を行っている。やり方は、教師が発問し、生徒が挙手か、あるいは教師の指名により答えるというものである。この活動のねらいは、重要文型の定着を図り、コミュニケーション能力の基礎・基本を育成することである。毎時間の授業の始めにwarm upとしてくり返すことで、テンポよくスムーズに行うことができるようになる。以下はその一部である。

T: What time did you go to bed last night?

S1: I went to bed at 11 o'clock.

T: What time did you get up this morning?

S1: I got up at 6 o'clock.

T: How long did S1 sleep last night?

S2: She slept for 7 hours.

T: What are you going to do tonight?

S3: I will study hard because I have a test tomorrow.

発展例として、1人の生徒に次々に質問をしていくことで、定型会話から即興的な会話へと移行する。以下がその例である。

T: What did you do last night?

S: I went to a Japanese restaurant with my family.

T: What did you eat there?

S: I ate うなぎ.

T: Oh, you ate うなぎ! Do you like うなぎ?

S: Yes.

T: Great! Me, too. How do you say 'うなぎ' in English? Does anyone know? It's an eel. (クラス全員に向けて) Do you like grilled eel?

## (3)Pair Work

A: What are you going to do this weekend?

B: I ( ). + a (関連する1文)

まずBになったつもりで、週末の自分の予定を考える。文のつながりを重視するという観点から、その後に加a (関連する1文)を加える。それらをペアで練習する。以下に実際の対話例を示す。下線部が+aの部分である。

S1: What are you going to do this weekend?

S2: I'm going to go shopping with friends. I will buy a new bag. What are you going to do this weekend?

S1: I'm going to play soccer with my brother. Playing soccer is fun.

次にこの2人の会話の内容を教師が他の生徒に尋ね、確認する。これにより、他の生徒も友達の発言内容を真剣に聞く習慣ができる。

T: What is S2 going to do this weekend, S3?

S3: She is going to go shopping. She is going to buy a new bag.

T: That's right. Very good. Then, what is S1 going to do this weekend, S4?

S4: He's going to play soccer with his brother. He thinks that playing soccer is fun.

私の場合、月曜日の授業で「先週の土日にやったこと」を、金曜日に「今度の週末にやること」を尋ねるようにしている。

## 3. おわりに

即興の活動を行うことは、「コミュニケーション能力の基礎・基本を習得し、活用して表現力を育成することができる」、「生徒にとっても身近なことが話題となり、積極的に話したり、聞こうとする姿勢ができる」というメリットがあると考えられる。もちろん、その場合の授業の大前提として、生徒と教師、生徒相互の良好な人間関係を構築することが重要となる。

## 特集 授業を活発にする「やりとり」の活動

# 「日本文化紹介」を意識した授業 —教師と生徒との会話から生徒同士の会話、 そして統合的な活動へ—

青柳有季

(東京学芸大学附属小金井中学校)

## 1. 日本文化を発信するために

「狂言」の舞台(日本語・英語)を身近なゴールにしている私は、日本文化の発信の重要性について意識することが多い。そこで、「日本人としての習慣・身近な文化」を生徒が言語化して発信する機会を、常日頃から意識して授業で設けるようにしている。そして、それらの様々なアイディアは、学年に一度、教科書の題材の延長上で集約するように心がけている。いくつかの実践例を紹介したい。

## 2. 実践例の紹介

## (1) 日本の身近な年中行事

以下は、教師と生徒との会話の例で、会話のあと、得られた情報をもとに、別の活動に発展させた。

T: I'll ask you "What is this?" So please guess. Hint 1, this is a doll.

S<sub>1</sub>: Ohinasama?

T: No. Hint 2, children usually like to make it.

S<sub>2</sub>: Tsuru?

T: Oh, paper crane? Sorry, the answer is "no". Hint 3, children make it the day before a school trip. Hint 4, we hang it out of the window. (ジェスチャーをしながら)

S<sub>3</sub>: Teruterubouzu?

T: Yes, that's right! Did anyone make one for our excursion tomorrow? Now, please think about Japanese culture in winter. Tell us about.

S<sub>4</sub>: Kotatsu!

S<sub>5</sub>: Otoshidama!

T: Nice ideas! Please say something from Japanese culture as a title and give four hints about it. Make your first hint difficult, "muzukashii", and make the others easier, "kantan". So, hint 4 will be the easiest hint, "ichiban kantan".

次に、「こたつ」についてのヒントの文を生徒からどんどん聞き出し、それらを整理して板書していく。

**[Kotatsu]**

Hint 1. It's a very popular thing in winter.

Hint 2. Many cats like it.

Hint 3. People eat oranges on it.

Hint 4. It's square and warm.

次に、「お年玉」についてのヒントの文を、過去形を最低1文は入れることを条件に作成させ、それらを整理して板書していく。

**[Otoshidama]**

Hint 1. We got it on New Year's Day.

Hint 2. It's a present from our parents and grandparents.

Hint 3. It's in a small paper bag.

Hint 4. Money is inside it.

このあと、生徒が書いたヒントの文を集めて「日本文化クイズ集」を作成した。ヒントの文と同時に、イラストも描いたので、授業の最初にグループ単位でカルタの練習を行い、最終的には4クラス合同で「日本文化カルタ大会」を開催した。その際、ヒント文の読み手はALTが行った。

## (2) 日本の地域と食文化

教師と生徒との会話から、生徒間のやりとりに移

行し、最後に発表させた。まずは、会話内のキーワードを板書しながら生徒との会話を進めていく。

T: Please tell me your favorite place?

S<sub>1</sub>: I like Okinawa.

T: Oh, you like Okinawa. Why do you like Okinawa?

S<sub>1</sub>: Because I like *goya-chanpuru* in Okinawa.

T: Is it a famous food in Okinawa?

S<sub>1</sub>: Yes, it's very famous.

T: Is it delicious?

S<sub>1</sub>: Yes, It's very delicious.

T: Do you make it with *goya*, egg and pork?

S<sub>1</sub>: Yes, I use *tofu* too. It's a very healthy food.

T: Are there many kinds of *chanpuru* dishes in Okinawa?

S<sub>1</sub>: Yes, there are, but I like *goya-chanpuru* the best.

T: I see. Thank you very much. I want some for lunch.

<板書> **Okinawa**

eat *goya-chanpuru* — famous, delicious  
*goya*, egg, pork, *tofu*  
healthy, many *chanpuru* dishes

やりとりを聞いていた生徒たちは、板書したメモをもとに文章を再生し、1人1文ずつ言っていく。

S<sub>2</sub>: I like Okinawa.

S<sub>3</sub>: Okinawa is famous for its *chanpuru* dishes.

S<sub>4</sub>: There are many kinds of *chanpuru* dishes in Okinawa.

S<sub>5</sub>: I like *goya-chanpuru* the best.

S<sub>6</sub>: I like making it with *goya*, egg, pork, and *tofu*.

S<sub>7</sub>: It's very healthy.

最後に次の文を入れるようアドバイスする。

T: When you go to Okinawa, please try it.

次に、5人グループを作り、役割分担をする。S<sub>1</sub>

は質問に答える人、S<sub>2</sub>～S<sub>4</sub>は質問者、S<sub>5</sub>は会話内容のキーワードなどのメモをとる人である。

<あるグループの会話例>

S<sub>2</sub>: Please tell me your favorite place?

S<sub>1</sub>: I like Tochigi.

S<sub>3</sub>: Why do you like Tochigi?

S<sub>1</sub>: Because Tochigi is famous for its strawberries. I like "Tochiotome" very much. They are very delicious. Do you know "Tochiotome"?

S<sub>3</sub>: Yes!

S<sub>4</sub>: Are there any popular places in Tochigi?

S<sub>1</sub>: Yes, there are. I like hot springs and Nikko Toshogu.

S<sub>3</sub>: Did you go there many times?

S<sub>1</sub>: Yes, I did. I always enjoy Tochigi.

< S<sub>5</sub> のメモ >

**Tochigi**

famous — strawberries, Tochiotome  
popular — hot springs, Nikko Toshogu

次に、S<sub>5</sub>はS<sub>1</sub>に上記のメモを渡す。S<sub>1</sub>はそれを見ながら、文を再構築し、グループ内で発表する。その際、グループのメンバーはS<sub>1</sub>の文が正しいかどうかを判断し、時にはアドバイスを与える。正しい文が確認できた段階で、S<sub>1</sub>は学級全体で発表する。

< S<sub>1</sub> が発表した文 >

Tochigi is famous for its strawberries. I like Tochiotome very much. There are many popular places in Tochigi. I like going to hot springs and Nikko Toshogu. I enjoyed them very much. When you go to Tochigi, please visit these places!

S<sub>1</sub>は発表した文をノートに記録する。また、画用紙に記入して絵や写真をカラーージュすればポスターとなり、より具体的な情報を学級でシェアできる。

上記の2つの活動は、色々なテーマに応用・発展でき、授業の帯活動としても有効である。今後も生徒が身近な話題を発信できるよう工夫していきたい。

## Interactionを生かした わかる授業

海部 祐希子

(兵庫県神戸市立烏帽子中学校)

## 1. はじめに

昨年度の神戸市中学校英語研究会の研究テーマにおける「Interactionを生かした わかる授業」のもとに、生徒の英語運用能力、授業参加へのモチベーションアップを図った実践例を紹介します。最終目標をImpromptu Skitに設定し、NEW CROWN Book 3のテキストの題材をもとに行った活動実践、またその積み上げを具体的に記したいと思います。

紹介する活動は文部科学省・外務省主催の平成24年度若手英語教師米国派遣制度での研修中に学んだことをヒントに、発展させたものがほとんどです。

## 2. 活動実践

最終目標に向けて、以下のような6段階のステップを設定しました。なお、活動の基礎となる英単語や英文法、英語表現の力を強化するため、WritingとReadingの帯活動を毎時間行いました。

- |  |
|--|
| ① Strip Activity (1対1) 質問⇒返答+1                     |
| ② Line Talking (1対1) 質問⇒返答+1⇒<br>リアクション+新たな質問の繰り返し |
| ③ Simple Skit (Pair) 暗記+小さなアレンジ                    |
| ④ Scenario Making (Pair) key sentenceを発展           |
| ⑤ Advice Letter (Group) 問題解決                       |
| ⑥ Impromptu Skit (Group) 劇                         |

## 3. 活動実践の具体例

実践例の①、②は主に会話活動として、実践しました。小さな間違いを指摘するよりも、自分の考えを表現することに重点を置き、少々の語順や人称、時制、発音のミスを気にせずに、ジェスチャーや表

情、絵を使って存分にコミュニケーションをとることを勧めました。

①のStrip Activityでは、Lesson 3の文法事項である“Have you ever～?”を使った質問が書かれたstrip(細長い紙)を持って会話をを行い、Yes, I have. / No, I haven't.だけでなく、プラスワンの情報もつけるよう促しました。また、生徒自身に質問を考えさせ、次の時間までに教師が英文と内容をチェックし、2回目の活動で用いたところ、大いに盛り上がりました。

②のLine Talkingは、ペアになった2人が、1分間で、与えられた質問事項から、会話を発展させていくという活動です。①と②の2つの活動を通して、生徒は自分の思いを英語で発信する楽しさや、相手の考えを聞いたり、それについて深く尋ねる経験をし、英会話に対する知的好奇心を大いに高めることができました。

③のSimple Skitは、教科書の本文に少し手を加え、ペアになって暗記、ペア同士でお披露目・評価する活動です。その際、少しでも「自分たちらしさ」を引き出すために、各ペアは「大声部門」「ドラマティック部門」「コミカル部門」「発音部門」を選びます。We're Talking ①、②、③、⑥で実践しました。

④のScenario MakingはWe're Talking ④、⑤にて実践しました。それぞれのTalking Pointの重要フレーズを用いるようなシチュエーションを4つ用意し、4人編成のグループごとにシチュエーションを選び、シナリオを作っていく活動です。重要フレーズを最低2回は使うという約束を設定し、オリジナルシチュエーションにもチャレンジさせました。シナリオは提出させ、優秀作品を評価・コメント付きで配布し、全員でシェアしました。生徒は

他のグループの作品を興味深く読んでいました。

⑤の Advice Letter は L7 GET Part ①の“What should I do?” を key sentence に用いました。雑誌の「お悩み相談室」をモチーフに、中学生が考えそうな悩み相談レターを6つ用意し、それを4人グループが編集チームとして返答記事を英語で作成するという活動です。悩みは、両親との問題や体形、勉強、友人、恋など彼らの日常に近いものを用いたため、生徒も気持ちを入れて解決案を考えたり、励ましの言葉を考えたりと、熱心に取り組んでいました。

最後に、最終目標の活動として、⑥ Impromptu Skit を行いました。生徒を4～5人のグループに分け、1時間は準備、もう1時間を発表という形で活動しました。題材は、We're Talking ⑦の“Could you ～?” を使い、こちらが与えた4種類のシチュエーション、

- ① 恋人の誕生日にケーキを焼きたいので、家庭科の先生に作り方を教えてもらうよう頼む
- ② 旅行中に道に迷ってしまい、現地の人に道を尋ねる
- ③ 新しい携帯電話を買ってもらおうよう、親に頼む
- ④ 恋人との待ち合わせに寝坊して遅刻しそうなので、親に車で送ってもらおうよう頼む  
(下線部は教師か ALT が交代で役を演じる)

に対して、生徒はある程度のシナリオを全員で考え、3～5分で発表します。ただし、生徒たちが“Could you ～?” と交渉する相手は教師か ALT になるため、彼らの作ったシナリオ通りの展開になるかどうかはわかりません。

発表は、「Action!」や「Cut!」と合図を出す役(1名、英語に苦手意識を持っている生徒)、与えられた場面設定の英文を読み上げる役(1～2名)、劇に登場して演技をする役(1名～全員)で発表を行いました。この活動では、生徒の本当の英語力、表現力、コミュニケーション力が試されます。生徒は改めて英語でのコミュニケーションの難しさや楽しさを感じたり、ちょっぴり自信をつけたり、また、他のグループの劇から学ぶことも大いにあったようです。

#### 4. 活動の成果

これらの活動を通して、まずは生徒の授業へのモ

チベーションが大いに向上しました。活動に参加したいがために、英語に苦手意識がある生徒も、日ごろの授業を真剣に取り組み、活動に少しでも参加できるよう、また他の発表の意味が理解できるよう、努力する姿が見られるようになりました。

また、生徒同士の学び合いも深まり、Peer Checking や Peer Editing も盛んに行われるようになりました。教室のあらゆる場所でミニティーチャーがたくさん生まれ、教え合い、学び合うことで、彼らも自信をつけることができました。教科書の付録ページを使って、自分の言いたいことを調べたり、教師へ質問することも増え、“What do you say ～ in English?” が教室中でたくさん聞こえてくるようになりました。key sentence がどのような場面で実際に使用されるのがよくわかったという声も、アンケートに多く記されていました。

他にも、別のグループの発表を見たり、シナリオを読むことで、その後の活動の中で、自分たちのオリジナリティを思考に盛り込む生徒が増えました。生徒のクリエイティビティーに感動させられることもありました。

初めは、生徒の発想を自由に表現させたいという思いから、小さなミスや発音に関して、細かい指摘を避けていましたが、生徒の発話に深く耳を傾け、間違いを直し始めると、生徒は嫌がるどころか、うれしそうな反応を示したので、積極的にミスの指摘や修正もしてあげられるようになりました。

#### 5. おわりに

これらの活動をするにあたって、日ごろからグループ活動を考えた配慮ある座席という背景が大いに役立ちました。英語の得意・不得意を超えて、学び合いの環境を作ることに協力してくださった各学級担任の先生方、また ALT を週2回も配置してくださった環境に、とても感謝しています。

英語教師は、英語を通して世界・日本の文化やコミュニケーションを教えます。自分を発信し、他者の考えに耳を傾け、新しいことを発見する楽しみを伝えることができます。日々の授業の中で、生徒が英語を使いたくなるような演出や仕掛けを、ぜひお試しください。

# 生徒の「発信する力」を育てる授業づくり —ディスカッション, ディベートにつなげる簡単な工夫—

山本 崇雄

(東京都立両国高等学校・附属中学校)

## 1. 「発信する力」の重要性

「英語でディスカッションやディベートができる」これは、国際社会で活躍する人材を育成するために、求められている力の1つである。しかしながら、これまでの日本の英語教育では、教科書の理解に指導の重点がおかれ、ディスカッションなどで、自分の意見を発信する指導は不十分であったと感じる。例えば、オーラルイントロダクションで、読む内容について丁寧な導入をし、新出語や文法を教え、読んで理解させる。進度に追われ、十分な表現活動をする時間がとれないまま次のレッスンに進む。その中で、受験指導も意識しなければならず、文法などの知識を教えることに追われる。どれも Teacher-centered (教師主導) になりがちで、生徒にとっては受動的な活動になってしまう。これではいつまでたってもディスカッションやディベートにつながる「発信する力」を養うことはできない。国際社会で活躍する人材を育てる観点から、もはや、中学で、ディスカッションやディベートを意識した指導をすることは避けられない。一方、これらの活動を指導することに難しさを感じている先生方も多い。そこで、本稿では、普通の指導をディスカッションやディベートにつなげる簡単な工夫を紹介したい。

## 2. 生徒が発信しやすい環境づくり

生徒が自分の考えを発信するには、Student-centered (生徒中心) の授業づくりが必要だ。生徒が発信することが当たり前授業にしたい。これには、朝の学活から、他教科の授業、放課後の活動まで、Student-centered の考え方を、他の先生方と(できれば学校全体で)共有できるといい。

例えば、朝学活では、連絡事項だけで終わることがないようにしたい。時間があれば、「右側の人は今朝食べた朝食について詳しく説明して下さい。左側の人はそれを聞いて褒めて下さい」や「左側の人は今日1日の時間割を説明して下さい。右側の人は、その中でがんばりたいことを1つ言って下さい」など、朝から「発信」する雰囲気を作ることができる。

他教科では、教わったことに対して、先生と生徒、生徒同士でやりとりをする時間を必ず確保してもらえるといい。このような、Active Learning の手法は、他教科から学ぶことも多いので、情報を共有し合い、良いものは英語の授業にも取り入れて行きたい。ただし、英語の授業では「英語で」行えるかが大切で、どんなに活発な活動でも、「英語で」できなければ、英語の授業にとってふさわしいタスクではない。

部活動でも、練習方法や課題など自分たちで考えさせる習慣をつけ、発信させる機会を与えると主体的な活動になる。

それぞれの学習活動における、生徒が持つ「自分の考え」「伝えたいこと」「理解したいこと」は、教師が教えることができず、生徒が自分で育てるものである。生徒に考える機会を与え続け、自分の考えを発信することが当たり前前の雰囲気をつくりたい。生徒が発信しやすい環境づくりが、英語で「発信する力」を育てる土台になる。

## 3. 英語の授業で

それでは、英語の授業でディスカッションやディベートへの土台となる簡単な工夫を紹介したい。

### (1) 教師の指示を確認する

40人学級で、全員に指示を行き渡らせることは

簡単ではない。そこで、指示を出した後に、“What did I say?” “What will you do next?” と指示を全員に確認するとよい。

例) 教師：I want you to read p.32 silently.

OK?

生徒：OK.

教師：So what should you do? Mr Tanaka?

生徒：You said, “Read page ...” Sorry, could you say that one more time?

## (2) 生徒の発言について意見を求める

1年生など初期の段階では、生徒の発言に対して、“Is his answer right?” “Yes, it’s right.” のような簡単なものでよい。学年が進むにつれ、“What did he say?” “What do you think of Mr Tanaka’s opinion?” と踏み込んだ内容にしていく。ここで、“He said, ..., but I think .../ I agree with him. / I don’t agree with him.” といったディスカッションやディベートで使える表現を導入するとよい。

## (3) 学習形態を生徒に選ばせる

指示をした後に、個人作業、ペア、グループといった学習形態を生徒に選ばせる。生徒に選ばせると、生徒が自分で選んだ責任を感じるようになる。

例) 教師：OK. Now check the vocabulary on p.

32. Do you want to do by yourself, in pairs or in groups?

生徒：In pairs.

教師：All right. What will you do?

生徒：We’ll check the vocabulary on p.32.

教師：How do you do it?

教師：In pairs.

教師：OK. I’ll give you 3 minutes.

## (4) 教師の発問をペアワークに

教科書の内容の英問英答などの活動では、教師対一部の生徒のやりとりで終わってしまうことがある。そこで、以下のように、発問をそのままペアワークにするとよい。

例) 教師：What did Raj learn? OK? What is my question?

生徒：What did Raj learn?

教師：Good. So the students on the right side, ask this question to your partners. OK?

ペアワークにすることにより、全員が教師の発問に取り組むことになる。ペアワーク後に全体で答えを確認する際も、生徒は一度ペアでやりとりをしているので、自信を持って答えることができる。

## (5) 教科書の Oral Presentation

Lessonの学習のゴールに、内容を英語でサマライズし、感想を言う Oral Presentation を置くとよい。初期の段階では、教科書の絵を使い、内容をリプロダクションすることに重点を置き、3年生では、自分の意見を言うことに重点を移して行きたい。

例えば中3の Lesson 8 では “English for Me” というタイトルで6人の生徒がスピーチをしている。その中で自分の意見に近いものを選び以下のように発表する。意見を引用し、自分の意見につなげる発表である。

例) Raj learned that he can use English to make friends. I agree with his opinion. English is used in many countries. If I can speak English, I can communicate with a lot of people ....

## 4. おわりに

ちなみに、今年の東京都高英研主催のディベートコンテストのB部門(初心者)の論題は “That Japanese high schools should abolish school uniforms.” である。中学校段階ではディベートまでいなくても、立論だけでもできると生徒もディベートをイメージしやすい。国語の先生と協力し、同じ論題でディベートに取り組んでも効果的である。立論、質疑応答、反駁、最終弁論といったディベートの流れと、それぞれの役割は日本語の方が理解しやすい。

このように、英語で「発信する力」を育てていくには、英語の授業だけでは難しく、他教科の協力も重要である。そして、授業の延長上にディスカッション、ディベートを意識し、生徒の「発信する力」を育てる活動を積極的に取り入れていきたい。

## 授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ (3)

田邊祐司 Tanabe Yuji  
(専修大学)

### 1. はじめに

教員養成やその後の教員研修などで、教師の声の問題が正面から取り上げられることはあまりないようです。それは、声が on-the-job で身につくものと考えられているからでしょうか。今回は3人の熟練教師の「声」への覚醒、そして鍛え方を語ってもらいます。

### 2. 声への覚醒

声は「音声器官を動員して空気を振動させる」ことですが、non-verbal communication (非言語的コミュニケーション) という分野では、発話に伴う言葉以外の特徴を「パラ言語」と呼び、その中に声を位置づけています。つまり、ジェスチャーや顔の表情などと同じく、声がコミュニケーションに彩りをそえる重要な項目であると考えられています (Berko, Wolvin & Wolvin, 2009)。

教室という空間で行われる授業でもまったくその通りで、声は単に空気を振動させるだけでなく、授業に、そして、生徒の心に大きな影響を与えるパワーがあることに気づかされます (Karpf, 2008)。

熟練教師3人にとって、こうした声への覚醒は教壇に立ってから比較的早い段階で起きたそうです。

B先生の若き日(?)の回想です。

新任の頃は体育会系のノリでただ大声を張り上げていました。しかしこれはスタミナ勝負のところがあり、30代に入ると通じなくなってきました。そんなときベテランの先生の授業を参観する機会がありました。その先生の教室での声は力が抜けているというか、むしろおとなしい部類でしたが、先生は生徒の心へと見事に

切り込んでおられました。「がなる」のが専売特許だった私にはこれは新鮮でした。声量で押すだけよりも、引くときにはあっさりといいてみる。ポイントはそのさじ加減だということが分かるようになったのです。

C先生も同様の経験をしています。

初任1週間で選挙運動終盤の政治家のようになってしまいました。声がそうなるそこから疲れが全身に回ってしまうのです。そんな私を救ってくださったのが英語科主任でした。先生の授業では、伝えたいポイントでは声を張り上げるのではなく、逆に声を弱め、間をたくさんとられていたのが印象的でした。「押しでもダメなら引いてごらん」というのは真実です。声への意識が芽生えてからは、自分なりに声の調音を意識するようになりました。その結果、授業のリズムががらっと変わりました。

コミュニケーションに彩りをそえる声を構成するのは、高低 (pitch)、強弱 (strength)、速度 (rate)、声質 (voice quality)、そして間の取り方 (pausing) です。それらを絵の具のように混ぜ、声を調音することで、メッセージという絵画が完成するのです。

### 3. 声の鍛え方

しかし、声の使い方は一朝一夕には身につくものではありません。彼らは何を意識して、どのように今ある声を獲得してきたのでしょうか。

A先生です。

「声に思いを」

音読のとき、我々は生徒に「気持ちを含めて！」

などよく言いますが、教師自身がこれを実践していないと生徒はついてきません。そのため、授業中は、日本語でも英語でも、常に「誰が誰に」、「何の目的で」、「どんな状況で」、「どういう思いで」、「どんな場所（空間）で」、「どんな時間枠の中で」、などの点を踏まえながら、話すようにしています。こうした意識があると、自ずと声質がついてくるようになりました。

さらにA先生は実習生にもひと言あるようです。

#### 「草食声」

最近、普通に話す声で授業を行う実習生が増えてきました。圧倒的に声にパワーがないのです。生徒にはまるで子守歌です。こうした声は今に始まったことではないと思いますが、私は「草食声」と呼んでいます。そんな声の出し方では授業がうまくいかないのは当たり前です。

A先生に同感したB先生は、具体的な声の鍛え方を示してくれました。

#### 「最後列の生徒の耳」

「クラスルーム声」というのは（田邊先生の）造語ですが、私の場合、実習生には初日にこれを伝えます。教室のサイズ、各クラスの生徒の特徴（ざわざわ型、おとなしい型、etc）に対応できる声を探させるのです。これは、臨機応変に声を調音できるようにするためです。

具体的には、初日の放課後に実習生を空いている教室につれて行き、「声出し」をさせます。そのとき意識させるのが、自分の声が最後列の生徒の耳に届いているのかどうかということです。教科を超えて実習生を集め、交代で最後列にすわらせ、「声の出し方」を鍛えます。ときには、各教科の実習指導担当の先生方に集まってもらい、ワイワイ、ガヤガヤとやってもらうこともあります。

「お腹の底から声を出さない」ということはよく聞くセリフですが、いざ実践となるとやはり難しい。

C先生です。

#### 「アコーディオン」

実習生や新任の先生に「腹式呼吸」といってもなかなか伝わりません（音楽や演劇経験者は例外）。そこでまたまた（田邊先生の）小技ですが、「アコーディオン」という説明を使っています。これは息を増幅させるイメージを簡単に伝えることができます。喉だけで声を出さないように、横隔膜を意識しながら、空気を吸ったり（breathe in）吐いたり（breathe out）させて、お腹が膨らんだりへこんだりすることを体感させるのです。そのあとに、長音“ah”や「あいうえお」の訓練へと持ち込んでいます。そうしていると徐々に彼らの声に変化が出てくるのです。

## 4. おわりに

3人とも期せずして声のパワーに気づいておられました。さほど声は「もの言う」のです。私自身の覚醒は大手の某予備校講師時代でした。授業内容もさることながら、声の使い方で受講者の数が左右されるという体験は痛烈でした（講師収入に直結！）。教室にチューターと呼ばれる授業チェッカーが複数入り、彼らが徹底的に私の声の使い方を指南してくれたのです。その内容はほとんどが、「パラ言語としての声」に集中していました。以来、落語はもとより文楽、歌舞伎、詩吟、さだまさしのステージトークなどを参考に、いろいろな手法で自らの声を鍛えています。

中学校の現場も事情は同じです。生徒の心へと切り込んで行くのはやはり声のパワーです。そういう意味において、話し方の勤どころではこれは外すことはできません。これからの先生方にはもっともっと声を磨いてほしいものです。

#### 【参考文献】

- Karpf, Anne (著) 横山あゆみ (訳) (2008) 『「声」の秘密』草思社。  
鴻上 尚史 (2013) 『発声と身体のレッスン 魅力的な「こえ」と「からだ」をつくるために 増補新版』白水社。  
Berko, R. M., Wolvin, A. D., & Wolvin, D. R. (2009) *Communicating: A Social, Career, and Cultural Focus (11th Edition)*. Pearson.



## 文法問題から何を知る

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

### 1. 英語のテストと言えは文法問題

日本における英語のテストには、必ずと言っていいほど文法問題がある。英語のテストなのだから文法問題があって当たり前だろうと思われるかもしれないが、そうでもない。最近、大学入試の英語で話題になっている TOEFL iBT には文法問題がない。かつての TOEFL には、Structure and Written Expression というセクションがあり、これが文法問題に見えたりしていた。しかし、iBT では個別の 4 技能とその統合のテストがあるだけである。

一方、定期試験でも高校入試でも、いわゆる文法問題と見なすことのできるテスト問題は必ずある。しかも、その種類も豊富だ。空所補充問題から、多肢選択問題、並べ換え問題など、出題形式が多様な上に、総合問題というカテゴリーでは、多種多様な問題が 1 つの文章にぶら下がっている。その品揃えは、あたかもスーパーかコンビニのようだ。

### 2. 文法診断に役立つ文法問題

では、これだけ文法問題を出題しているのであれば、生徒はどのような文法事項が苦手で、どのような文法事項はさほど躓き<sup>つまづ</sup>が少ないのか、というようなことがよくわかっているかというところでもない。生徒の文法事項の得意・不得意を先生方に聞いても、意外と正確には答えられない。「文法問題」自体の得意・不得意は言えても、「文法事項」の得意・不得意は言えない。

どうしてそうなるのか。これにはいくつかの原因があるだろう。1 つは総合問題の影響である。総合問題では、様々な言語知識をバラバラに問うているだけなので、この結果からは、個別の文法問題の出

来以外には、生徒の文法力について診断的な解釈を行うことはできない。

また、ごった煮の総合問題と比べると、空所補充問題は本当にすっきり見える。しかし、空所補充問題のように、一見、問題形式が統一されていても、問うている文法事項が様々であるために、どの「文法事項」について知ろうとしているのかわからないことが少なくない。次の「空所補充問題」を見てみよう。

下の日本語の文の意味を表すように、カッコ内に当てはまる適当な単語を書きなさい。

(1) Thank you ( ) this interview.

このインタビューをありがとうございます。

(2) I am glad to ( ) here.

ここに来られてうれしいです。

(3) I have never ( ) a Japanese joke.

私は日本語の冗談を聞いたことがありません。

(4) How ( ) have you been on this tour?

このツアーにはどれくらい参加していますか。

(5) I've enjoyed ( ) with you.

お話しできてとても楽しかったです。

(6) ( ) pleasure.

どういたしまして。

解答：(1) for (2) be (3) heard

(4) long (5) talking (6) My

それぞれのテスト・ポイントは、次のようになるだろう。

(1) 前置詞 (2) 不定詞

(3) 現在完了(経験用法) (4) 疑問詞表現

## (5) 動名詞 (6) 慣用表現

これらの問題の出来からは、(仮にこれらの文が教科書の既習の文章からとられたものであることを別にしても)、「文法知識」があるとかないとか、穴埋め問題が得意・不得意という程度のことしか言えないだろう。

こうしたテスト・デザインになっているのは、もしかすると「定期試験」の文法問題が、熟達度テスト (proficiency test) の文法問題のデザインを踏襲しているためではないだろうか。熟達度テストとは、特定の指導を前提としていないテストである。そのため、熟達度テストでは、幅広い項目からサンプリングを行うことになる。この「幅広さ」は、「難易度の幅広さ」でもあれば、「サンプリングの幅広さ」でもある。「サンプリングの幅広さ」とは、この場合、「文法項目の多様さ」を意味している。このようにデザインすることで、「一般的な文法力」を測ることができるのだ。しかしながら、こうしたテストの結果からは、指導の柱となっていた特定の文法の知識の習得がどうなっているかについて、知ることはできないだろう。

### 3. 定期試験における文法問題のあり方

それでは、到達度テスト (achievement test) である定期試験の文法問題は、どのように作るべきであろうか。

まず、定期試験でテストすべき文法項目のリストを作る。これらの文法項目は、その定期試験の対象となる文法項目の中から、評価対象とすべき項目を取捨選択する。教えた文法項目がすべて評価対象となることもあるかもしれないが、そのうちの一部だけが対象となることもあるだろう。また、文法項目の中には、グルーピングが必要なものもあるかもしれない。たとえば、分詞による前置修飾・後置修飾、関係代名詞による後置修飾、などが範囲であれば、これらは1つのグループに入ることになるだろう。このときに、グループごとの重みづけ、および、グループ内のそれぞれの文法項目の重みづけをし、それぞれに必要なテスト項目数も決めておくとよい。「分詞による前置修飾」についてであれば、「過去分詞」の場合と、「現在分詞」の場合があると考えれば、

最低2問は必要だし、それぞれが規則動詞の場合と不規則動詞の場合と考えれば、4問は必要となるということだ。

次に、それぞれのグループをどう測るかを定める。おそらくグループごとに相性のいいテスト方法があるだろう。たとえば、文型や上述の前置修飾・後置修飾などの syntagmatic な関係を見る場合であれば、並べ換え問題などとの相性がいいように思う。これに対して、時制や態の選択や前置詞の選択など paradigmatic な関係を問うのは、空所補充問題との相性がいいだろう。

ここまで来たら、それぞれのグループ内の文法項目を問うテスト問題を作成していく。これまでの準備ができているので、問題を作ることはそれほど困難なことではないだろう。ただし、文法問題に使う文が、どのような場面で、どのような意図を持って、誰が誰に対して発しているのかを意識して作らないと、おかしな文になってしまうことがあるので、注意が必要だ。

日本の定期試験における文法問題を見たときに、意外と4択や3択などの多肢選択式問題が少ないことに気づく。たとえば、空所補充式の文法問題であっても、それぞれの空所に対して複数の選択肢があるのではなく、全ての問題に対して複数の選択肢が「プールされている」ことが多い。こうした問題は、英文を作ったあと、ポイントの箇所を空所にして、下にそれぞれの空所に入る単語を集めればよいのだから作成が容易である。ただし、こうした問題作りでは、選択肢がそれぞれの空所に複数あるわけではないので、各テスト項目のねらいが見えない。

たとえば、am, is, are が選択肢にあれば、be 動詞の現在形の区別を見ているのだということがわかる。それに対して、because, so, but が選択肢にあれば、これは接続詞の使い分けを見ているのだということがわかる。多肢選択問題では、正解の選択肢と誤答の選択肢を作ることで、テストポイントが明確になる。

英語の定期試験は、指導の成否を見るために行う。だとすれば、定期試験の文法テストは、文法指導の成否を示さなければならない。そこに見える課題が、次の授業の課題である。

# 授業レポート CLASS REPORT

## コミュニケーション力を高める 英語の授業(2)

### 一どのように授業の中に プロジェクト活動を取り組んでいくのかー

林 秀樹 Hayashi Hideki (滋賀大学教育学部附属中学校)

#### 1. 教科書を活用し、コミュニケーション力を高める

授業の中で、教科書を全く使わずに授業をされている先生はいないと思います。ある数学の先生と話をしているときに、「英語の授業はすごく丁寧に教科書の内容を教えておられますよね。私たち数学では教科書を使わないことも多いのですよ」と聞いたことがあります。教科書の特性があるとはいえ、その言葉には驚きました。英語の教科書は、各社様々であり、ある文法事項が1つの単元として扱われていたり、他の教科書では、本文の中にただの1文として扱われていたり様々です。それにより、教師もどのように教えるか、かなり影響されているように思います。教科書を活用してコミュニケーション力を高め、自分が設定したプロジェクト活動につながっていくと思います。

私が大切にしているポイントは次の5つです。

- ① 4技能を高められること
- ② 内容を深く理解できること
- ③ 教科書の表現をできるだけ自分の言葉として使うことができること
- ④ 興味を持てること
- ⑤ 生徒が自主的に活動できること

*Meiling:* 健ってバスケットボール上手だな。すごいな。

*Ken:* そう言ってもらえるとうれしいな。でも少し暑くなってきたな。

*Meiling:* そうか。何か飲み物がほしいのかな。

*Ken:* 少し暑かっただけで、大丈夫だよ。

*Meiling:* よかった。じゃ、もう一度バスケットボールをしようよ。

生徒たちがプリントを使って教科書の本文を再現する中で、それぞれの登場人物の気持ちを英語に変えて表現しようとし、読み方に工夫をしたり、ジェスチャーをつけたり、表現も自分たちの言葉に変えて読んでいく姿が見られました。

このように本文の流れを意識し、できる限り自分が登場人物になりきって読むことで、その文が自分の言葉として使えるようになると思います。

#### (2) ペアで内容を確認しよう

教科書の本文の内容の読解の確認を、ペアでQ&A形式で行うことがあります。教師からの質問に答えるパターンだけでなく、生徒同士で行うことで、緊張感も少なく、インフォメーションギャップのようにゲーム感覚でできます。AとBに分かれ、それぞれ違うページの内容について相手に質問をし、相手の答えを採点します。

～Aの生徒用のワークシート～

#### 2. 実践事例

##### (1) 本文を演じてみよう

教科書の本文の場面を再現させるときには様々な方法がありますが、“mind reader”というプリントを使って生徒に本文を再現させる方法があります。

例えば、NEW CROWN Book 1 Lesson 1 p.21のプリントでは、以下の日本語訳が書かれています。

Aの人用 教科書 p.○○の内容について質問する  
《問題の出し方》

1回目：英問を普通に読む。

2回目：英問をゆっくり読む。

3回目：英問の答えの中心になるところを強調して読む。

4回目：英問を日本語で質問する。

5回目：英語の答えを読み、相手が復唱する。

《採点方法》

3点：Perfect(1回目または2回目で答えられる)

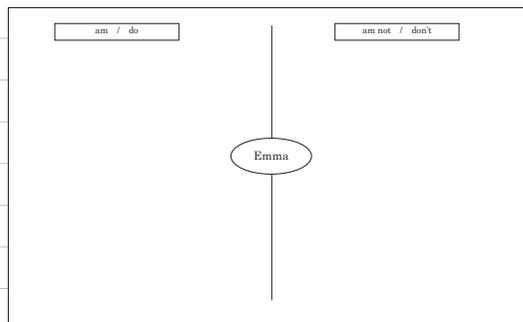
2点：細かな文法的な間違いはあるが、意味は通じている。情報が不十分、または単語のみ3回目で答えた。Yes, ~ / No, ~ の文のみ。

1点：4回目で答えた。Yes. / No. の一語のみ。

プリントには質問を用意しているのですが、生徒たちに質問を作らせて、おたがいに質問をさせると、よりチャレンジングなものになります。そして、この活動のポイントは、問題の出し方です。1回目から5回目まで5段階あり、相手がなぜ答えられないかを考えながら、相手の立場に立って問題を出していきます。もしどうしても答えられなくても、「答えを読み、相手が復唱する」となっており、答え方を学習していくことができます。このような活動を増やすことで、生徒が自主的に学習していける基盤を作っていきます。

(3) 教科書の登場人物について

教科書には登場人物がたくさん出てきます。次のようなプリントを使って、登場人物についての4技能を使う活動を行うことができます。



《活動の手順》

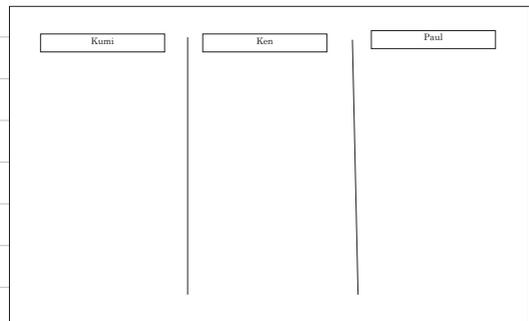
NEW CROWN を読み、登場人物エマについて、プリントの左半分肯定文で表現できる情報、右半分否定文で表現できる情報を、日本語または英語3語以内で書いていきます。

ペアで、1人がエマ役、もう1人はその友達になります。友達役の生徒は、プリントを使い、エマ役の人に英語で様々な質問をします。エマ役の人はプリントにメモした内容をもとに、その質問に答えていきます。役割をかえても行います。

それぞれがエマの人物像を自分で想像し、先の活動と同じように、エマ役と友達役に分かれてQ & Aを行います。このときは、教科書に書いていないことでも自分で想像して、活動を行います。

最後にはそれぞれがエマになったつもりで、想像も交えながら、自己紹介のスピーチを行います。その後、その文をノートに書きます。

今まで習った教科書を読み返すこともでき、それぞれの登場人物像を想像しながら楽しく活動することができます。今回紹介したプリントでは、肯定文と否定文で分けましたが、be動詞と一般動詞にしたり、助動詞にしたりと、仕分けのポイントを变えることで様々な活動に発展させることができます。



(4) 教科書の本文を読んで感想を書く

様々な事柄に対して、自分の考えをしっかりと表現するためには、教科書の本文を読んで、自分の考えや感想を書く活動も大切だと思います。しかし、教科書の内容を読み取ることと、それについて感想を書くことには大きな差があります。

③. 自分の考えや感想を伝える

教科書から読み取った内容について、自分はどんな考えや思いを持ったかを、自分の言葉で伝えていく活動を紹介します。

ワークシートを使い、4つの観点について、本文から英文を探して抜き出していきます。

① 印象に残ったところ

Xxxxx.(本文から抜き出した英文)

This sentence is impressive.

② うれしかったり、悲しかったりしたところ

I am happy or sad to read the sentence,

"Xxxxx."

③ 驚いたところ

I am surprised to read the sentence,  
"Xxxxx."

④ 興味を持ったところ

I am interested in the sentence, "Xxxxx."

講師A)	講師B)
生徒B)	生徒A)
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">                 This sentence is impressive.             </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 60%;"></div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">                 I am surprised to know that             </div> </div>	
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">                 I am happy or sad to read a sentence "             </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 60%;"></div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 15%;">                 I am interested in a sentence "             </div> </div>	
講師A)	講師B)

次にペアで①～④の質問をして、お互いの答えを交流していきます。

① 印象に残ったところ

Which sentence is impressive for you?

② うれしかったり、悲しかったりしたところ

Are you happy or sad to read the story?

③ 驚いたところ

Are you surprised to read the story?

④ 興味を持ったところ

Which sentence are you interested in?

それぞれの質問に対する答えは、ワークシートでまとめた部分が、そのまま答えとして使えるので、どの生徒でも、スムーズに交流を行うことができます。

生徒同士で、上記の4つの観点について、交流をしていると、違いや共通点が出てきます。例えば、

A: Which sentence is impressive?

B: ○○. This sentence is impressive.

しかし、Aの生徒が印象に残った文は、Bの生徒のものとは違う場合があります。このような場合、Aは必ず相手の発言を受け、

A: ○○. This sentence is impressive for you, right?

と確認をし、その後、

A: △△. This sentence is impressive for me.

と交流がつながっていくように指導をしました。ただ、一方通行の問答ではなく、相手の内容と自分の



考えを比べながら交流を図ることで、双方向のやりとりが活発に行われるようになってきました。

A: Which sentence are you interested in?

B: I'm interested in the sentence "○○."

A: Oh, you are interested in the sentence "○○."

I'm interested in the sentence "△△."

A: Oh, really?

Why are you interested in that sentence?

B: Because ...

本文のどの部分に興味を持ったかだけでなく、その理由をお互いに尋ねるようになりました。理由の答えは、本文には書いておらず、自分で考えながら答える必要があります。また、同じ部分に興味を持った生徒がいたとしても、その理由は個々に違う場合があります、相手の持っている情報を聞く必然性が生まれてきます。

交流の目的は2つあります。1つは、英語で自分の感想についての問答をできることです。もう1つは交流することで他者の意見と自分の意見を比べ、それぞれの考えの違いや共通点を見つけることです。

交流後は、ワークシートの中央の部分に交流したことをもとにして、感想を書かせました。

生徒の感想には、「英語で感想を書けたことはとても自信になった」「人によって印象に残った部分が違うことがわかっておもしろかった」等がありました。

本稿は、教科書を使っでの活動を紹介しました。次回は、考えや意見を自分の言葉で表現し、交流する活動を紹介します。

# 小学校英語 Just Now

## 仲間と進んでコミュニケーションを 図ろうとする児童の育成 —真桑小Happy Time

加納 志穂 Kano Shihō  
(岐阜県本巣市立真桑小学校)

### 1. はじめに

岐阜県内の小学校の約2割は、文部科学大臣より承認を受けた「教育課程特例校」として、「英語科」を設置しています。本校の場合は、高学年の年35時間の「外国語活動」のほか、低・中学年に年20時間の「英語活動」を設置しています。

本校に在籍するALTは2人おり、HRTはどちらか一方のALTとTTで授業を行うことを基本としています。そして本校にはHappy Roomと呼ばれる外国語活動・英語活動用の特別教室があり、本校のこれまでの財産ともいえる教材や、Hi, friends! (文部科学省)のデジタル教材が入っているICT環境が整備されています。児童たちは大変恵まれた環境の下で外国語活動・英語活動を行っています。

本校の研究主題は、「仲間と進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」で、目指す児童の姿は次の通りです。

- 言語やジェスチャー等を用いて、相手の思いや考えを理解しようとしたり、自分の考えや思いを伝えようとしたりする児童
- 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しんでいる児童
- 言語の面白さや豊かさに気付いたり、多様なものの見方や考え方があることに気付いたりする児童

### 2. 指導計画について

高学年は、主にHi, friends!を用いた指導計画で、低・中学年は、真桑小学校独自の指導計画を毎年改善しています。

	慣れ親しみ	コミュニケーション	気付き
高学年	↑	↑	言語を用いて伝えることの大切さが分かる。
			様々な価値観(もの考え方や見方)があることが分かる。
			日本と外国の言語や文化の共通点や相違点に気付いている。
中学年	↑	↑	意見や考えを求めたり、それらを付けて話したりしようとする。
			相手に柔軟に対応しながら、話したり聞いたりしている。
			世界には様々な言語があることに気付いている。
低学年	↑	↑	うなずいたり、確認したりしながら聞こうとする。
			日本と外国(英語圏)の言語や文化の共通点や相違点に気付いている。
			これまでに慣れ親しんできた語彙や表現を場面に合わせて使っている。
			より多くの仲間とやりとりしようとする。
	単元で慣れ親しむ語彙や表現を場面に合わせて使っている。	自分から進んでやりとりしようとする。	
	単元で慣れ親しむ語彙や表現を使っている。	表情やジェスチャーを手がかりに聞いたり、ジェスチャーを用いるなどして話したりしようとする。	
	音声やリズムに注意して、まねして言っている。	相手の言うことを最後まで聞いたり、自分の言いたいことをはっきりと話したりしようとする。	
	音声やリズムに注意して聞いている。	相手の目を見て、聞いたり話したりしようとする。	

#### (1) 付けたい力を明確にする

外国語活動の目標にある「慣れ親しみ」「コミュニケーション」「気付き」を三本柱として、各学年部の付けたい力を「付けたい力段階表」にまとめ、これをもとに、単元のねらい・単位時間のねらいを明らかにして指導計画を作成しています。

昨年度は、低学年は「慣れ親しみ」、中学年は「コミュニケーション」、高学年は「気付き」に重点を置いて指導計画を作成しました。低学年は、様々な語彙に慣れ親しめるよう、それまでほとんどの単元構成が4時間でしたが、3時間に変えました。単元数を増やすことにより、より多くの題材と出会い、より多くの語彙に親しむことができました。中学年は、低学年の頃から大切にきてきている「5つのマナー(Good listening, Eye contact, Clear voice,

Smile, Gesture)」に加え「より多くの仲間」「自分から進んで」「確認しながら」「反応して」など、コミュニケーションにおける付けたい力を具体的にしました。高学年は、「言語や文化への気付き」を生み出せるように、単元の導入時には、日本語と英語の音声やリズムの違いに気付けるような活動を位置付けるようにしました。また、単元を通して、日本や外国の文化の違いに気付けるように活動を工夫しました。

## (2) 児童の実態を把握する

児童の実態把握は、「補助簿」と「児童への意識調査(アンケート)」から行っています。

① 補助簿：児童の振り返りシートの「自己評価」「相互評価」と、活動時の「教師による評価」を、単元で1枚の補助簿に記録します。これにより、「自己評価」と「教師による評価」の差異が見られる児童が明らかになり、次時に、どの児童をどのように指導するのかを考えることができます。

② 児童への意識調査(アンケート)：英語活動に関するアンケートを実施して、児童の英語活動に対する意識を調査します。活動時の児童の様子に加え、このアンケート結果を指導計画の見直しに反映させています。

## (3) 単元構成を工夫する

低学年は、「慣れ親しみ」に重点を置き、各単元3時間構成のため、第3時には簡単なコミュニケーション活動を行っています。

中・高学年は、単元の出口に行うコミュニケーション活動を効果的にするために、第1時には「基礎的活動」を位置付け、第2時には「疑似コミュニケーション活動」を位置付けます。これらを通して慣れ親しんだ語彙や表現を用いて、単元の出口では、伝えたい情報を、自信をもって伝えることができるようにします。児童が単元のゴールの姿を見通して、単元を通してねらいが達成できるように、第1時の導入時に、モデルスキットをALTとHRTで示します。また、高学年においては、デジタル教材にある「モデルスキット」を視聴し、出口のイメージをもちます。

## 3. 指導と評価について

### (1) 活動の場の設定を工夫する

「たっぷり聞く活動→真似して言う活動→使ってみる活動」といったように、段階的に活動を仕組むことで、児童が負担を感じることなく語彙や表現に親しめるようにします。ひとつひとつの活動の特性を理解した上で活動を仕組んだり活動形態を考へたりすることは、なかなか大変なことです。「この活動で本当にねらいは達成できるのか」といった視点を常にもつようになっています。

### (2) 振り返りを工夫する

振り返りシートを用いて振り返りを行うことを基本とし、振り返りシートは、単位時間に1枚か、単元で1枚かを、児童の実態に合わせて選択しています。「慣れ親しみ」の自己満足度を図るために、慣れ親んだと思う語彙や表現のイラストに○を付けます。「コミュニケーション」に関しては、“Today's point(本時大切にしたいこと)”に沿ってできたと思うかを◎○△で自己評価し、仲間のよさについては自由に記述します。「気付き」に関しては、言語や文化について気付いたことを記述します。

振り返りシートを継続して使い、綴じていくことで、児童は自分の伸びを自覚してきています。教師にとっては、個々の児童の自己評価がわかるだけでなく、相互評価により、教師では見取れなかった、多くの児童のよさを情報として得ることができそうです。そして、指導計画作成や次時の指導に生かすことができると考えます。

## 4. おわりに

本巢市の小学校には、英語科の免許を保持する教員は少ないため、専門外のHRTでも指導計画を作成して授業を行えるように、英語の職員研修“Staff Happy Time”を、毎月の職員会の後に15分間行っています。ひと月にわずか15分間ですが、職員は大変意欲的に研修に参加し、授業実践に生かしています。グローバル化が叫ばれる今、こういった研修は大変価値あるものと考えます。

# Communication Breakdown

**James Hershman**

(Former AET at Higashiosaka City Nisshin HS, Current NET at Osaka Prefecture Ikuno HS)

A common complaint among native English teachers is that they sometimes feel as though they are an afterthought at their schools. Job expectations, performance evaluations, and even simple things like class cancelations or schedule changes are sometimes not communicated to NETs. In short, there is often a breakdown in communication between JTEs and NETs. This situation leads to a more stressful than necessary working environment for NETs and JTEs alike. So, what can be done to improve the working experience for everyone?

A good starting point is finding out the level of the native English teacher's Japanese ability. Many times the NET has some ability to read and speak Japanese and can therefore be given a copy of the schedule that all of the Japanese teachers receive. If the teacher has little or no Japanese reading ability then designating a Japanese English teacher as a "go to" person in cases where the NET has specific questions will allow the NET to feel comfortable about approaching someone for help. If the designated teacher feels that this is a burden, perhaps the responsibility can be rotated among JTEs on a weekly, monthly or yearly basis.

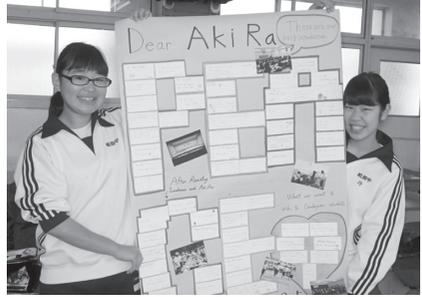
Assuredly, Japanese teachers have many responsibilities and having to look after another teacher is just one more task on a seemingly endless list of tasks. To make this task easier, it can help both parties if the JTEs give clear instructions to the NET regarding their work responsibilities, lesson planning and expectations in the classroom. It can be extremely stressful for NETs if they don't have a clear idea of what the JTE expects of them during their lessons together. As uncomfortable as it might be for some JTEs to speak frankly with their NET regarding their performance, an honest assessment usually proves to be beneficial for both teachers.

Though NETs do not usually have as many responsibilities as a typical JTE, this does not mean that they have an easy job or a stress free life in Japan. JTEs should keep in mind that the NET is not only working in an unfamiliar country but also trying to live here, and so taking care of simple daily tasks which amount to nothing for JTEs can sometimes be overwhelming ordeals for the NET. It is exceedingly supportive when JTEs offer to assist when difficulties arise for the NET outside of the workplace. True, NETs can make their own lives easier by studying Japanese and JTEs should encourage them to do so. JTEs that are willing, and have even a bit of free time, might offer to tutor them in Japanese. It could even be a wonderful opportunity for the JTE to improve their English as well. Why not think of it as a good opportunity for a language exchange?

Lastly, it is important to keep in mind that NETs are asked to teach with various kinds of teachers, in a variety of classroom situations, and with JTEs who may have completely different personalities and teaching styles. The NET is tasked with being extremely flexible. This might be the most stressful part of the NETs experience working in Japan. If JTEs make an attempt to understand the NETs perspective, and be flexible themselves, they can improve the working environment and make the NET feel as though their views are respected and their work appreciated. Additionally, though it is true that most Japanese are extremely polite, busy Japanese teachers might overlook something as simple as saying thank you to the NET after a hard days work. It comes down to this: if you treat the NET like a valuable member of the team, they will tend to perform better and feel more comfortable in the workplace. It all starts with communication.

# 英語指導の スパイス

## アキラ氏への手紙



SPICE

山崎寛己 Yamazaki Hiroki

(大阪府松原市立松原中学校)

教科書と現実世界をつなげたい。そんな思いから、アキラ氏へ手紙を書くことに取り組んだ。すると勉強が苦手な生徒たちも、「ほんまに届くん!？」と目を輝かせた。英語が、教科書の中や、外の世界の言葉だと感じる壁を取り払われたような、そんな気持ちだったのだろうか。

どんな読み物でもそうであるが、その分野に関する背景知識を得ることは、読む上で非常に有効である。今回の *NEW CROWN Book2, Landmines and Aki Ra* を読みこなすためには、地雷のこと、カンボジアの戦争のを知る必要不可欠であると感じた。『アキラの地雷博物館とこどもたち』(三省堂、2005)には、教科書の内容に加え、アキラ氏の幼少期から現在に至るまでの様々なエピソードが綴られている。彼に手紙を書くからには、彼自身のこと、地雷のことをもっと知らなければならぬと、日本語の書籍の内容も援用しながら授業を行った。

教科書を読み進めていながら、徐々に生徒の「書きたい」という意識が高まっていることを感じた。しかし読み手のことを考えれば、紋切り型の内容の手紙を生徒全員が書くことは相手意識に欠けると考え、クラスで1枚の大きな手紙を作ることにした。以下がその手順である。

- ①小さな紙(縦5cm×横10cm)を用意する。
- ②4つのパート:(1)自己紹介,(2)教科書の感想,(3)平和のメッセージ,(4)カンボジアの中学生に質問したいこと、に分け、(1)の自己紹介と他に1つを選んで書かせる。
- ③模造紙に、②で書いた紙をパート毎に貼り、手紙にする。

これなら5クラスで5枚の大きな手紙を送ることになり、アキラ氏も読みやすいと判断した。しかも全員が描いて初めて、クラスの手紙が出来上がる。どの生徒も、自ら書く英語が外国の、それも教科書に出てくる人物に届くということで、いつも以上に真剣に取り組んだ。

これまで様々な場面で、英語で書いたり、話したりすることには親しんできた生徒たちだったが、今回の作業は、こちらの想像以上に達成感があったようである。あまりにも日本とかけ離れた現実がカンボジアにはあることを、彼らが分かったからかもしれない。

I think it's very difficult to remove all landmines in Cambodia, but I hope that they are removed someday. So I want to raise fund. (生徒の手紙より一部抜粋)

教科書の内容と日本の生活では考えることのない現実を目の当たりにし、中学生なりにできることを考えて綴った結果が、そこには確かにあった。教科書と生徒をつなげる工夫は常にこちら次第である。

